

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの50年-』 No.8

今週のキーワード！ネルー首相 人物の魅力と垣間見た一面の素顔

『インド私録』ではネルー首相の興味深い横顔が語られています。日本の総理大臣としてはじめてインドを公式訪問する岸信介総理大臣がデリーで行われた歓迎大会で演説する際、そのヒンディー語通訳という大役を担った武藤氏の緊張を和らげようと温かい気遣いを見せた一面。その一方で、池田勇人首相夫妻の訪印時の晩餐会では使用人に対しぞんざいな態度をとったこと。あまりに無意識と見えた行為に、武藤氏も尊敬するネルーが「やっ

ぱり家ではああいう生活をしているんだなあ」と幻滅を覚えたといえます。第3回放送の「ニザーム・ウッドインでの日々」で、画一的な社会に住む日本人がインド社会に行くと非常に理解しがたい経験に直面すると説明しているとおり、それはインドを訪れる日本人なら一度は感じる違和感かもしれません。

岸首相の歓迎大会では、首相の演説がヒンディー語で通訳されたことから、意気を感じたネルー首相も予定になかった演説もすることになりましたが、その際のやりとりは岐阜タイムスがよく伝えています(下記参

照)。このとき、ネルー首相は初対面で、武藤氏曰くまだ「ペーペー」の外交官だった同氏の名前を覚えていて、「武藤君、頼むよ」とヒンディー語を日本語にして岸首相に通訳することを頼んだといっています。なるほど、魅力のある人物だったことが伺えます。

通訳の本分は、語られたことを忠実に翻訳すること、が、しかし……。

岸首相の演説通訳の反響は通訳冥利に尽きる体験でしたが、通訳は自分の解釈を挿まず、語られたことを忠実に翻訳することだと語ります。その意味で、池田首相夫人にネルー首相がアショカ・ホテルについて見当違いの説明をしても、敢えてそのまま池田夫人に伝えたことがそれです。一方で、ネルー首相の使用人への粗暴な態度を見咎める池田夫人の発言も、それは一切ネルー首相には伝えませんでした。「もし、それを伝えていたら、その場は白けたでしょうし、会は台無しになった」と語ります。もう半世紀も前の話ですが、もしもそういう配慮がなされなかったらと考えるとはらはらしてしまう場面です。



上 ヒンディー語通訳の岸首相の演説が、ネルー首相以下インドの観衆を感動させたと伝える6月13日付け岐阜タイムス。
右 1957年5月24日、デリー市庁舎前広場で行われた訪印歓迎市民大会で演説する岸信介総理(中央)。その右手でヒンディー語に通訳する武藤氏。この壇のこちら側では2万もの観衆が大喝采を送った。(ともに武藤友治氏所蔵)



ラジオ・ニュームンバイか
らのお知らせ



第10回放送は8月3日です。